

## 島田妙子さん新聞記事②

### 命つないだ10円玉、「私が家族を引き裂いた。タエコは生きてるか…」(産経新聞 2014.6.8)

壮絶な被虐待体験を赤裸々に語り、「虐待をしてしまう大人も助けたい」と全国を飛び回る、大阪の映像制作会社社長で兵庫県児童虐待等対応専門アドバイザーの島田妙子(42)。3年間で180回にもおよぶ講演では、恩人たちの予期しない再会が一度ならずあった。

《3人きょうだいの長兄がガラスの灰皿で父に殴られ、大けがをした翌日、妙子は家を出た。そして、何となく虐待を察知し「何かあったら電話しろよ」といって、十円玉10枚を渡してくれていた学年主任に思い切って連絡。通報を受けた担任の女性教師が両親を学校に呼びつけ、「虐待してるでしょ。言い訳は許しません」と叱責してくれた。中学2年の春だった》

講演がマスコミやロコミで評判を呼び始めていた平成24年、妙子は、6年におよぶ虐待から助け出してくれた担任教師と27年ぶりに再会した。

「救ってくれた先生のごことがずっと気になっていました。連絡しようと思えばできたのに、不義理してしまって」と妙子。一方、元担任教師は「(妙子の)親子の仲を引き裂いてしまった。あの子は生きていたのだろうか心配していたが、生きていてくれてよかった」と喜んだという。2人は正反対の心配を胸に、長い間、互いを気遣って生きていたのだった。

虐待を受けていた最中、家に泊めてくれ「わたしを守ってくれた」同級生と再会するきっかけとなったのは、昨年8月の神戸での講演会。終了後に若い女性が話しかけてきた。「さっき話されていた同級生。わたしの母親です」

今年5月には、中学2年で虐待が終わったあと一時預けられていた施設の女性職員に再会した。「見たことのある人だなあって思って、講演の中であえてその施設の実名を出したんです。すると、その女性が目を大きく見開いて…。講演が終わったあと、2人で涙を流し抱き合った。

中学卒業後に就職し、22歳で結婚。3人の子供(娘2人と息子)を産み、33歳で認知症の義父と車いす生活の義母を介護することになった。苦難を抱えながらも、必死に、幸せに生きていた妙子の人生のターニングポイントは平成22年12月「いつもわたしを守ってくれた」我慢強い次兄(小兄(しょうにい))の死だった。「ともに虐待を耐え、普通の兄妹とは比べものにならない、かけがえのない存在。小兄が亡くなったらわたしはもう頑張れない。そう思っていました」。だが、死の直後、医師に知らされた事実で思いは変わった。「人の役に立ちたい」といい続けていた次兄は、自分の体を新薬開発など医学の発展に役立ててもらうため「献体」を申し出ていた。虐待のニュースが流れると、いつもメールで連絡してきて「何か役立てないか」と悔しがっていた兄だった》

妙子の講演には、わが子への暴力に悩む母親たちも駆けつける。妙子は「やってしまったことは戻らない。その日のうちに子供に謝ってキレイ(な心)になって、愛していることをみせることが大事」と、母親たちに語りかける。

講演先は少年院や議会まで広がり、妙子の思いは各層にジワジワと広がっている。「議員の先生を前に話したとき『何でも遠慮せずに言ってくれ』といわれました。そのとき『虐待対応組織や啓発の予算にはふんだんにお金をつぎ込んでいるのに、防止の予算はその何分の一に過ぎない。わたしは虐待の加害者も被害者もつくりたくない』と言ったんです」

そんな妙子の講演は「魂にバチコーンと響く」と評される。「講演を聴いてくださる人たちが抱える悩みに自分がすべて対応することはできない。でも、体験を話すことで虐待廃絶のため、みんなが考えるきっかけづくりができる。さっと話して相談を受けて、さっと去る。月光仮面のようなものかなあ。よく言い過ぎですか」